









星野文庫

金油もとうごんれ世とすりとあそびる  
みとおの屋のと紙ぬはひよ  
三十一字れことのまことわざりうち  
もやね。代よめくらふねひわり。あ  
被みにあよつうちよあらひひどりぬ  
一よたあくをぬとくとのまよとふれふ  
れなまくわいとくん筋。とくと今れ世のま  
うへろあらえよたうか。とくとぬめなれ  
け。城をもとれは小さいよとくとあくとく  
あじりとまほの人ときねいの筋をひくわ

たひのときとおなまうのひととあやし  
とおれみとむら紀のつゆとありの  
ある古今枕草といふのなんいめへれと  
城とわととく今乃せかねからてとやうわ  
とあとやらへとせのまくとよみとおとお  
とりとあへとわがわらとくとおとおとお  
はく、一年れわする事あととよみとおと  
くおわらあふわまことわはぬ物をもは  
のわやくわらとむらゆつ前角へたりあろ  
がよまくはれをわらあとへうりよきわく

ゆ  
とおれひ一年八月のとよたまくとて  
卷十あまう二河よりて物をあそく四季  
をあわてとひづからへきと、蟹巻山のね  
のとくらあはせむらひみあへ川のわざれ  
まくらぬうめなんんをわづねすへとおと  
おと

秋林四季物語卷第一

春部

城北徽夫長明書

星野文庫

地やあれ神代のいゆ（云々くわひと  
ゆくをきよたそアヒルよもどりゆゑとこ  
そくゆてぞろくわゆくわゆゑとあれ  
うちにいたれあらゆいわうそりうわくの  
中に一川をわかれしとくわくはのくまむろ  
しれどもわかれし五神となりまひぬ四  
とこうちのみとあるやうせようひとみれ  
りのわめとうちにあるまくうのはばらとお

てゆまつれ凡代也くはるの代也と  
ねりのゆきをよしとめりわざと  
やうせんとよしとめりわざと  
あたまにかづくよめりわざと  
ゆきあらわすとめりわざと  
りきりて大原由比うらや浦と乃ほ  
那とほく島あらひあらわ  
浦のきくわなはいわゆりあ  
きれうわねくとくのまち  
このまことかくめまくとくのまち

かと御身のやうに  
うちかねてわざをのけお風をとる  
まうわりのあそわせらひかくまもじ  
つれそとあいゆとあれどもさあはいた  
はあめぬゆうへこゑとわらひくま  
せみくはりわらひうれやれ

御事あがめ姫の内種まくらを差め見ゆ  
ゆゆの具は古代より人代より元は  
なりゆくとて一人の御身とすと  
わぬまだりとてはめりとあらばよ  
種の本音よぬりと易ひとて元の宣  
三行よわるありわひむんじれぬをにえ  
ゆきなりとて天地山陵とてうんいふ  
勢おりとて御屬里の御拜ゆとれさせ  
絶ふやうとてあきをとて西海をむ御さめ  
もりりあは次一と筋力わすけく見え

はくみくもゆくいぢりとくふく  
りとせんうどりゆくぬじとくふくとい  
ゆくあゆく中居れゆくひりとむりと  
とわくきくわゆこり事あううんわゆく  
あくとくわゆとことと筋小わくとせりよ  
ともふわんげゆまう天たに方とおつま  
せぬまにとくとく方拜とくわゆくわゆくと内  
ゆく神ねおゆふそなへとまくらをゆだらま  
きくとくわゆくうらわもひうちひくゆ

ゆきうれふ、お大根とあそびつるがとこも  
ちやうりともちんじゅく美術へらゆうわ  
城納めくとてまくとそくと名はくとく  
今、かくまく下へあれとくもくわ  
うきはくとく文あへあへくとく  
のよしもあひりくよいまとうりへくら  
きあへりあへく方あへく屠へ割たうとくと  
れ、蘿、鬼の想ふとくとくとくとくのあ  
きおふのわらへづれしきわへとくくと  
こやうて、いふまほぬくとくれ、一家厚ま

やく一家ことを用ひまへ一門とて内ら  
と處じよとつてての文あをゆるやう  
所とある所は元日より二日三日れあき  
まく西名指とやあそびつゆゆひひ  
うりふとあらうのは耳のとれわへた  
まわりて死ぬとむりなむるやもがねわ  
きあうわとせり、からりーがめあゆりへ  
げくらふわくら筋めよもうだるれきち  
くわくことあめーとあうわとて筋め  
わあく筋めよよりとくまきりぬとえだ

みより百乃けりとれどりよあふれりとれ  
あくのたきはかどりわれと御記ハギ  
あきくさんひらひらおつて筋めよ  
火の右代めにてとれ  
とありこれれれ丁のうへもとくうれをん  
かねとわがくのめうとくうとくわく  
くわくひの因人なすふくまのあくのう  
きのを井とひかとくわくめりよあくの  
ととくと神祇を祀がくでくわくわくう  
のれとめすのぶわくまくゆ 小束之

やうくまとうのはひりへおも南殿よ  
ちあらはねのほんがりみあらにと  
まの女帝のよそわい執柄の活きよふたう  
うぬつもまくへあそぬへれすとくわく  
にかくみくさけりよめいりのやせう  
えまひもくじれもやうへかくねほくどくう  
あくとせあら奉たとみか祚くあきため  
一なりへ朝拜小船御院のとくらじも  
かいかりへ小これば、いりくとこあるを  
わざなりやに日乃あらゆへあらゆへせ

事とくせられりあらむれあらへとお  
ひひそはつた日はそゑとく初位坐一位  
よりあそばかれてつまくとくく奉へ昇  
進城とけとくあらあらへかく有れ奉よと  
ひはぬんへたそひた位うらあそばぬまく  
城かくとくよう(まう)は、わは信城れはせ  
わかくとくいとめそとくの事の城の城はくと  
すはともよづれこりぬひなうへこ  
のは花山みとくりせふ日みへねへあま  
ねまへ七日て勢ひよとあらわせくは

なまくらへしわが身はまづらよわすと  
れれありひきりまつあそくせんゆりへるたま  
くわわきみとくわせんゆりへるたま  
けらよねあめうめうめうめうめうめうめ  
きくわみとくわせんゆりへるたま  
け年はよめよめよめよめよめよめよ  
れ一いとひのれにとひのれにとひのれにと  
は一年のむわくひのれのれのれのれのれの  
あとくわせんゆりへるたま  
てやまへあまたせんゆりへるたま馬の波を

えりひてあくびのうすくへゆるふよ  
てまいるの勢ひ急とすゆる今ふ十わすら  
四散角あそすすりらぬらまん日進  
せんあそまつせりふとこそ小比陣もと  
はまほみまわとあらそ候北邊使はか  
た判事がいとたむてはんうまとれどア  
めありきのくわよほんじよとよち  
あくねとくのうな事れ一川のくわよなれ  
はまくのとくに飯ニえのりらうらうれ  
ゆわきなとくわよまくわよまくわよまく

にとくに浦被法地あとぬをだすまくいみ  
きよとひよとみよすまくはまくとつをた  
きぬなりあてせわうせうふせうひがま  
ゆにとくにあひのゆよお見つと東寺乃一の  
多者うとあくましめあへゆりあくまく  
らきて南殿アリまくれけりとぞあく  
あくまくまくじなとぞとひのとぞと  
長地久乃出ひめりるのたうのめのうま  
うセとまくはせりふとまう元日より祭師

中坊おとこをひきとこまく事  
あれ、後七日、まもる院  
あそたこあらし、やはり大田にま  
あらかあさか今、南敵わざわざと  
あらゆり室と天井れんじく秉和ひく  
めあらゆりよもとあらゆり  
四月のうちあらわすとてやみこよひを  
あらわすとてやみこよひを  
かとくいはまくとてやみこよひを  
かとくいはまくとてやみこよひを

のゆと廻んとてうれしとゆり十九日  
とくに西の三村とあもとまと兵をいたり  
ありとせりあがめり地りれ山風りとれか  
一キモトアツル也トトトナリ廿四日乃ある  
志とみたるの門やへあくゆとくわすと  
あくゆあくゆとくよくくうとくわく  
アキモハ巻をばくへと事あ筋く  
きむね玉ハシヒトとととととととと  
一女立見小  
野のあいとあらはれとくわく  
志氏ノオのやくわらわくとくよくとくな

通一せのほりりんくらまきよつと  
かとあらはりとくはれとめのとめ社ハとよこ  
れ西國なる一の主井やくわりてみと  
ゆうふとねれ御神なれば桓武のとく  
きよらわりとくゆくゆく見すとくさうと  
伝一おりてとくゆくゆくとくゆくとく  
玉象はははひゆゆくとくゆくとくゆく  
百王のゆくゆくとくゆくとくゆくとく  
とくゆくとくゆくとくゆくとくゆくとく

秋林に季物語卷第二

春部

春を度りかよひうらと  
陽よぬもひみうち一極の匂ひどりそろ  
かみけよ吹とひそく宣れても百忙に  
まよ耳あう角とふわぬとと去  
まのをれりひはるかにうなり御見舞  
越はやく月をみよあれとひうり  
まはすゑねら一かどと三葉乃院の花  
と見ゆる時月うみきほあうりのひと

ととととめとなんらくさの、厚んとおき  
よ八月かとあることある初度れまほり  
ハとよもあくわき角とせまくの山とお  
おむりよの丁ちの身紙ありととおつるく丁  
紙りあらうとは丁の陰少とく支遊乃體  
とよひうきぬか了たるく一淳和院別  
當勸學院乃別勸學館院の庵をう辨學  
院乃庵あうてん角くつあうせんぬう生とお  
に道二院に庵うめんくと角のござま  
とみうとてあえとよたよとよとよとよとよとよ

二家の事をこれとよわづり——あま城  
折桂と云との事——ひやまととまとは月  
はうるぬれゑの罪わくを井にう波かめ  
侍者よたうよつるとてゑきりくらと紙束  
ゑじこれ法式四十もありニは——らよ内  
御坊より文武乃あめくちあらうりとは  
をこちひそめふす——なれどもあ  
免すととまで鷹をとむ廣供よゐくわくと  
一久白川のみとの院みくわづ坊より

時文宣王のさう見え事より奏務りふへけ西四  
はわすあはれあ津浦代津圓をとへよれは  
御のふるにせうゆけりふよとくいさ  
ひのもりの跡かとむ津ぬりとくい  
あとのひとくとくとくとくとくとくとくと  
てあくうまくとくとくとくとくとくとくと  
ゆとくとくとくとくとくとくとくとくと  
はりそれはう先師とく顔圓とくあとのと  
よあ九哲れ庭とく下山山下山事也  
寮のかと寔穂の庭紙あうと詩書あゑハ

周易尊論などとあるとぬる内にてせん  
トわきひはとめくは後寫とてとせよ  
けり 雜字のひのひありよしん詩かをう  
はりそあらじぬくれば意紙があるとす  
ゆへ 主上の御院主持家ゆくもをこな  
れ さよ わりふきくんといふあまつ  
きはりつとくにあらじの文武がわやまと  
ほりきりわけのむすびがうりてう石よき  
ひてあらばよの第一小冊とわ」とど  
虎くまんあらふとむらあまくせうさん

のへんそくとひづりの處 これ月日と  
あらじとあると日ととねりとことく  
一又十九日の御とんじんとくとくとく  
にあらじてゐるやうに教主とくにあら  
ゆゆ冲見れうるわし處らるべ一治部れ  
つとんつとくわくわくさんと處くまくのと  
ひく南敵にてをとむりとなりやはい神と  
席の五像ともあらまき一とぢん又ま  
る聖魔の神事處ととあるととる  
一氏れふくとくとくとくとくとくとくとく

てまへゆく祐とは袖よりひるめよ  
あもあとのぬよすとのなよるのねは  
いはあとを祐やちりんにこゑはす  
の向のがくよれわくそれ要すとらしかる  
よせばねくよゐにうくらはく秀才さうじと  
ひをみがけ日没とからくわうす室則營至  
相道真公延喜ことをかたむんじくわくと  
くわく日没といわき雨にまとの法会ゆく  
祐はすとゆくゆく代ねくゆくゆくまよ  
まよもをゆくやめとの事なり

秋林四季物語卷第三

春部

萬の葉のねありあやうぬ小かまみれす  
月くらへり風ぬくまれ山眉のくられこ  
とすとすあんくあまくさんわすくあつタ  
え続のあいをゆくゆくあらと經わせた  
うふにわのことを初に二月夕をすよ  
がんとのゆをかみせことを西御殿とも  
らひもよからむらむら橋の吹きとめろ  
もがくとれ角りとめろ木とまにれら

あつて是の事の外は、先と云ひて  
ゆきもよきもあまむらぢのとひからむくろり  
かとあがてどよ殿よりもう綱ふとみあまくへ  
をちとわらのとんちの袖はくらむとそ  
ばえこひとくのせたれにだとあひひとひ  
ぬまきとうへんとくとさうとおうとおうと  
ははとめそ、三日せまのらあのせまくくぬ  
うまきだくらせん古瀧水はうらがまくひのい  
／＼すこづるのをめよア種で西さうと流  
すひまくわくのをまくすひまくわく

れなりゆきとくのそりゆにきて文章  
を大あくらうとさせじはのとちひくも  
まくとくまくまくね又清原殿古瀧水(ふくま  
ありゆなくらまくとくとく死みがごくらま  
うれびりわくとくとくとくとくとくとくとく  
ありゆなくらまくとくとくとくとくとくとく  
河(ふく)を産多岐わだわとくの園籠  
えんわりやれとくとくとくとくとくとくとく  
ありやうりやうりやうりやうりやうり  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

つとほうすだりわのむよ、主歎れに  
きくはうゆつる先へあこのむかひを  
まゆにすすめてゆうかうてわゆと  
あくわくあとうやふありぬうてわゆと  
きくわくよゆくせんわう、あらうやうと  
りもみてよめみをひれう、雲よ映  
ら見ゆくわ、まやまよ部野れえあ  
ゆうよまやひきとあられあくとく続と  
せあれを報せり、おやひくとくま  
志をうよそりうてうわれどりくら

ねー十二日とひよ、十日にひの都、吉  
野りひまふ死のゑくれりあけひんきと  
すがりてちりゆう毎のが房ゆくへゆ  
せらひぬさらへや花見いいくらなとほ  
ひのむれよ、ゆうれりとひこせんとゆ  
くわくとおも想門徳をれかどもは  
あらひあらひとひのむと山あくは  
くわくとひとひとひをあせうるひく  
一とよむわひなせ一日とりよめに和寺  
あられ大师の會住をこかんと一の長者よ

又雜文集やつる筋あすく小風うふつよぬ  
うりをとすふらんせまつてめぐらすめうりと  
のぬすへこあまつとととととうなり女七日と  
りよなん御月のとあるとく南社よふま井  
あづらひめり壁へととのわづひつよとと  
ややか東院のみきれをこゆく、いいくたとを  
りまくねをやうくあれあまうなむ

歌林四季物語卷第四

夏部

城北徵夫長明書

夏々々よなつと持続のまづれのもの  
物をとめくをめくのうすくわたりれあれどそ  
さくらはくわくわあめりゆをぬよけとまくに  
角あめのわくらみあまくひとくくわく  
なまくわりとあまくれやくわくをうへこ  
とやうのさんりのわくわくをはれめくわくわ  
くとくまくまくわくまじえのひとくくわくわ  
くとくくくとくとくとくとくとくとくとくとく

ありんをのきにあらむかとてまわ  
内のことをつゝみたる官人内侍内侍とぬ  
えもつととのこよりふのあくべ  
あくべあらう内侍ありゆゑりぬすとを  
あれひとけりかてせよみやわく内侍  
きよきよをよなへてほくはく上  
がりくわくひとくわはなみまは服とる  
にえとよみひとくはなみまは服とる  
け六脚扇とあまふとくはまわつて  
れどまう扇とくはまうにゆめとくは

あるとあらみくはきりあら  
ひやとけりもくのさうじとくに日暮  
えくひとゆるつととやのまわくまわくま  
いきんとくれり成機中はんざとけとけと  
官のたとくへうり記りはれりとうとく  
でと二省のうみせりてきのひだりくや  
とこなひまくわねばかりつとめられせら  
あくとくふくまくはせりくみよりまく  
あらわしに書生武生みくわゆひのを  
よたうゆめきり八日よ灌佛のほとけ

さうしてよこの事推古の時代よりかと  
ちと南敵のあつたてが青壁ひものあ  
あふとすりわきぬも見すくあも乃はきと  
れぐく梵音紙ともすすきりゆきもとを  
こすみぬかうさんづくとやめよすみ  
ねたとすきとあひわじうくよなゆうへ  
跡と牛とせりてまうのやり僧都つゝ  
ちふくをゆくとけといとせてうれかくく  
とく御のまことのうつらうとせきとすれ  
とこだまことわくひゆきあは灌佛ゆとのとれ

は沖佛小水せんよのまうよおてしなう庵  
一じり釋迦如來像是藍城とのまうこ  
やこそそくすりわうり一日これうまとよのう  
努力よ小天どりあくとまうあまくつうてゆ  
をあういのう跡とれありあめりーと  
なんじく閑自れ齒詰れりゆうとくとくれ  
うよ歟んとねとあとれがまうりゆー中の  
酒の日紙由形志多とひーとがもととれ沖  
角わいのう多く志津ひりうくの筋蟹  
もうもくばどひ貴布祢、齒社乃橋社松尾

此處の神代よりの古ちるふるてとあるま  
りはとてはあきよれりよもく速幸  
くとてはりてをみちとつたりと  
くとてはりてをみちとつたりと  
もとてはりてをみちとつたりと  
て神代とてはまうわふのとかくかの神代と  
てはまう事とてはまう事とては  
なりふうへ松尾うりきとくぬつまとの山の  
内山はまう事とてはまう事とては  
神代とてはまう事とてはまう事とては

てぬほり院宮指政閣自大臣は國家を守  
たる所からぬるありゆくに金を御調度  
小まことけりとあまし一也病のゆゑとひ  
御座ひやねをあらひなるがくかくらうわ  
えとやせりせとばり葵うへとくわくとく  
えとやせりせとばり葵うへとくわくとく  
とよとくわ六帖れども

玉みきにめりあわひとありありと  
お神てとせりとんもとくす

とよとくわあくおほひきり一束大詫

のうううーといひはうわー院れゆめ  
と圓白ひ其をひとむじとひのひがまひ  
てあそひきりあつとかくらまくま  
よやの供人ゆうとて神輿うちゆゑふうりわ  
ううかくれをとひようするものとせうと  
とくくわまひひとありえ花はまえふる  
れくみのわくびらくに幾うくくく  
放免ありたつたのたあくあくくく  
あけすうりうなゆくあつとくま  
くみくみくみをあたつて花はまくわ

らそきこと能ト人まへ御身垢とう  
きにゆつりあとこそあ社の神祇も仰る民  
のぬたひ圓白かはつひくはかへりとま  
まうしーきの由權貴あ社あととまう  
くがゆひありこれ御祭の欽明れどんと  
よりくあとととととととととととととと  
武の聖君は事ひねくわうわうわうと  
えいわうとととととととととととととと  
よの御身垢うわまのつらげ神とくと  
くわやぬわのあもがよれとあれひ

一成天武はまくわらじうけ一みすひと  
後一集はまくわらじうけ出國の愚祐とおもあま  
ひぬ下駄とすあくぬつと大ひびのさんあま  
にてゆりてあもとわづく松尾日吉と  
みれく葉御神あむかぢくまこと  
社は萬院あそせられゆくゆく由事へとう  
のみと弘に行はれとくにひらがのゆこ  
とありと伊勢ていとくとく井ふたそらでば  
沖津の山林をもとめあるをまよひゆひわん  
こ有翁子内親王あくぬつやんせれり

勢あすひぬ野れますといりやまあら  
きりへじとこのほのほのとせがひ出のん  
はゆのまとまなとあるくみと理とさあ  
ん佛とアリモとがくがもやあく血とあせ  
きどとくあくとくとくとくとくわりゆく選  
子のうちの三こいじとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

きよひのいとが御神乃古心もみうりんの  
えれ海やつよあくわ——正直六佛神と  
りりゆくとみ——あふとひだ

秋林四季物語卷第五

夏部

しるれ人志の袖の角もすこ小はくと  
次の肩ぬりと腰のモリとと付くとさきら  
わくねとゆひら——おひのからあ  
とのぬきとまつことひづと心のとむらたふ  
——とよすくわくわく——ぬれとわくと  
ゆくとまくらとあつもむれ浦舟ゆ——  
ゆくとまくらとあつもむれ浦舟ゆ——  
ゆくとまくらとあつもむれ浦舟ゆ——  
ゆくとまくらとあつもむれ浦舟ゆ——

かくともこのうちのへんはうらわす  
わてはひりとねもありこゝへゆく  
ゑわくとる左近はよしもとつ  
ふはくとことねりとむかへたとろじま  
もあわそきひに日ふとこかねる有川れ  
ゆけよそ、左近のひまでほひとくたとく將  
監お曹ひどしつがとく左近三萬よかくに  
ひたうぬつまむけよほとひて商社もあ  
いとをこかねと井戸とくはくわくらふ  
城あくまぬまくはくとくわくらふ

お屋をよへ廻るとお見ゆ易られたこゑはく  
まづよりあれ内へはきとのかよりきく  
とおのあとをとあせたのねはくさき  
おーとをひゆつてくわくにわやよのれ  
あきゆうりあらん、油敷りは簾のあくとく  
煙草葉わらよせはくもるのあくとく  
ゆせてまちふくらのせめのくもく  
廢物のれ音をかまお見ゆれそのうち  
にまうりふあくとくあくつことよひをなみ  
やひあみとくとくとく

まふせれ日もととひりと座りとまくあそび  
つまといひゆるはきとあはりれこらととづきを  
わよあまておうとおとあるのをわやめま  
除目とこねんとあるへたりとやまとなりた  
日とそこあるふは後れわやめとゆつをわや  
あくあくそりまへぬあ筋めをみあうと  
ひる陽かくうみんのつもくとせとせとせ  
こえぬとぬにうもくとせとせとせとせ  
けうわくとぬてとめくつりと兵部のふ  
えんせきくとゆくとゆくとゆくとゆく

小まきととめう方人よつとわぬアリテ  
毛あくのくわゆすのれとうとくやうよ  
さの風とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうと  
とえくひだの日がんとあくふう日がんと  
ひまく露臺かととたるに閣白玉と城主房と  
あくとあめいろ東大寺延暦寺興福寺圓  
城寺それにケル本寺あらうとあらうと  
王經と名の傳承小く傳承をまく承と  
やわらぎとゆきととゆきとゆきわらぎとゆき  
と書シ一系れ御門の長保と務と同と七日とよ

や一かやんとくわくとこゑんれけりひよふ  
お佛はんとくわく一わくと國家安全民を  
さうくまう場とのわうくくれはゆもとなり  
多内のかのりくらむまつりほとひてお振  
おほみねうばふ渴とわくとくとく事  
なき

歌林四季物語卷十六

夏部

あああああめりーしーれーれーれー月  
ぬうくのくがくよゆーとくわくとくわく  
のあーとーひのくわくのくわくえくわくね  
涼あと風のり歌のまくまく秋のわくそい  
にかじみアレひまー人をねとくれとあ  
けどりあととあととあととあととあ  
うとととが見のなるーとくわくはあうりん  
おとこみれてゆんとくにとくふくよみた

て玉子はちゆみ室化雪氷とまもりてたどよね  
り鬼きのぬばらあくまの内のかみあそびい  
らしきれは雪ひひりの氷あひりわかとてう  
おとえせたまひうこそとまつてうと十  
み日のきとめのひれそののまことまつて  
ひと御くとあそびいとあそびくとてとなすあと次  
かひのやだうへはうけとありうくれは  
むきうけ日ひにとあがとまもりてうとく

さくやとせとまんせなまへこつらかめ  
ふりと肉厚あくあそと川筋へいとくれま  
ごうりはそこよとくとまひあだしこゑ  
あきあき小枝ぼらわきとひあきとゆうよ  
それうに身ひわきあだとほりをゆくと  
あたねは、ほりとみわきをれつとまくとな  
きとらのひりやうへ一月、あ筋、うへあま  
角えれとらとやんあくととくまくひりを  
内谷の山あらひの井室生ふもうけふ

魚と足をもぬけぬく  
お原わらはまつり  
うみのわくひゆとかくまく  
わんとこれとく  
とあかとふくはくのとく  
やすりねたとく  
社ノ山川のよいき  
お浦とみだとく  
ときや第の橋とくわく  
みちづくとくわく  
おゆとくわく

はおまよあくべにけりと重うそせ乃山あさ  
と川よあてとあへーれほとをとがへて  
神くみえぬゆわきやうへ

歌林江李物語卷第7

秋部

城北微丈長明書

風秋風よもやかあひてあこらねをう  
らひひ一葉よ山移のあめうとく、月の  
けりとさきふゆよすあきう川をれうを  
あととくとせんとあむれよらくうきよさか  
ひく遠山れうすとよあひのあらふなうりと  
來れはなれまし、あらうくよてわらきころ  
ひくよとよとよれは小倉の山の雄かよ  
わせへと一束を重ねよ、人は席を

まく雨とたゞか秋めれまよは  
うらふ秋の月とえぬれは風を志す、あれ  
月は秋めくわうとせ月としていた  
ゆきもはり月れ、うりあみはゆく  
林が翠ぬとめりとくとくらうめあれと日と  
ゆく夕ゆはわきれとくやまきかくすか  
よひよ峯よりとみのちく梶乃美とちよ  
ゆきぬかとぬきは待実れあむとあくわ  
とくはるをあひとく今宵よりと中  
庭あくまづけとれからんたゞかまく

はうねうひの魚をさうはりとあらす  
せあわこよそれいとゆとさんりくとある  
のやまとあるあとつるばりせんと見れい  
まつねふお葉やのきのほくをひりね  
とみづけとくをとれらのあくわりとくまく  
はゆうくはせのれゑかととくとくあくは  
りあれてとくまくわと幸とうとくはうと  
一々あらわらあははくまと盂蘭盆を  
まもる法事せりわくわんなりとのあと  
まなみへりのな祐寺やまととくとくとく

禮ともまれうらあくは南歎りく(あつ)  
ひ報恩の作善すとこどひく經本せとく  
きやまくらへるあくと内侍不<sup>アシテ</sup>出  
がくとよに乍ひ船とあくととくとくとくと  
やうとくとくとくとくとくとくとくとくと  
らぬひお撰のあらとこあられぬやうとの事  
をうねいとあられ肉か弁きとくのまると  
うきてとれくとくとくとくとくとくとくと  
ねやわらくとくとくとくとくとくとくとくと  
むとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

こぢよと月とあかてむもて鷹の里をひ  
きとあはくよとまじめにちうそつりぬ  
れ公事なり女日あましや小鷹狩乃こそ  
らめりといつましとゆりわう御代  
ゆく風ふとをれゆりとなり

歌林四季物語卷才八

秋部

白あられとあこりととあひつねと見る  
わからありのあらく月よあと病よせ角  
ちくをあれわざるくもわくぬよ野鳥た  
いつまがくちくのまくわくわくとくら  
城たぐとようふをととあくくくとくの  
きあくととよくわくとくのほとくとく  
うふけたゑれいこうくにみあきてえと  
ゑあくよ咲く防萩のすみをとくとく

勤病よわきてやまよへとひそひごらあ  
一あつわまゆよもとせうやあらぬまき  
みゆきとおへくれはめのとくをとて  
こからりたあらわゆめなうめかうあさ  
角つともみきはうたひあひいつのく  
かねーをゆとおへあらとくのりゆく  
やまもとはじめのわあみにましむらゆ  
いじとくせいかいとゆのをくゆくゆ  
一せんねのれうとあくゆくゆまゆ  
はあくとくせうせあくゆ代よにうをく

照宣公のねぐらのせじあふとくく  
なりひらくせうのせじのせじのせじ  
りせじをゆけりのりけりのりけりのり  
一せいかくすくゆがり因あつてくく  
とあらわあらわとくとくとくとくとくとく  
みかつとくとくとくとくとくとくとくとく  
一せいかくすくゆとくとくとくとくとくとく  
がくゆくゆとくとくとくとくとくとくとく  
今くとくとくとくとくとくとくとくとく  
かくとくとくとくとくとくとくとくとく

和の法はひり御代にゆきとくの  
辭せれりあめ社上乃御角りよを  
てまきらてはなひやとねーをあひ  
えまつま六月十日わすりた日なん吉日わ  
かうへぬうへんかうくへやせはと  
てやの日とがく年号ともわゑを  
嘉祥とのゆうてぬくことと嘉祥  
と祥りうよよりくらめうきとめ社  
縣主祭の道幹り日記りけろけく除  
日ハより日紙あらゆることとなる

あらよあらゆうたと官達やよあと  
りそゆる京官の除日たと外ノ殊の  
除日などやとふくわきぬるまくあら  
をあらうととくゆくゆんじりておのうは  
うちの城あらゆて仕事らるゝことなるて  
者をあまととぞせとへあらえりととが  
あらの除日などやとのとて京のがち  
むれをまうたまのなうんとまくとく  
みのれんとくとくとくとくとくとくとく  
あらうむりあられ解りかやとせのまと

一  
とひりてのりの往還乃勞とひりてのりを  
お涉りけりあ事にてるもとへめれに代  
よらんとあわすま筋 はといひうり  
もとくわざりとおへあきりぬゆと  
なり十三日とひりかくま西廻り(ナム  
貝いのせとあとひれ月)とひて御  
うちもる欄を高めと酒ひとひのうち  
とてすとねりとねりとねりと  
みうめれが節 はとく神うりのと

ゆふああとぬきの西月のこあひれあ  
まつまわはとく左右馬をいたとひ  
せりけりきりくはううまたりとひをゆ  
たとひくの月とあふとあふと  
女二日はみちかくの山あひ山をゆ  
つまれーわとむく

秋林四季物語 卷第九

秋部

さくへはあきくもじりのうらめきて  
まへりうりもんせれくひとみわく  
りぢりとれのまへをほとをゆ  
ゑふうりせわれもとてゐ  
れく吹あそよみかたのねのぬこと  
すきをぬる簾すとあひゆうてとあら  
くいをぬる簾すとあひゆうてとあら  
をあもと見すといはれぬひまく見れ

志村とうわぬあとよ 野の里とあ  
ろりゆきわらひのゆへ いとやうはと  
れ九日やとまよ八日とうとえ 因幡移の  
たとくへねとれをふとくとせせひと  
一とくわくとくとくとくとくとくとくとく  
とくわくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくわくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくわくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくわくとくとくとくとくとくとくとくとく

れをあらひのまへにとよむへあせら  
うす月をもとむあひゆのまへと  
まへるはとひかとそひへとあは  
もとひゆと萬りあゆとく  
うへとくはと萬りゆとく  
ねとくはと萬りゆとく  
そとくはと萬りゆとく  
うへとくはと萬りゆとく  
わゆとくはと萬りゆとく  
いわゆとくはと萬りゆとく  
山のゆとくはと萬りゆとく

度とあまは伊勢の馬群、邊城を出門  
うちけ やくわらせきとよしり十  
一日アハムギより上郡（アマツシマツ）と南風（アマツシマツ）  
山のひとがおづかひにまつた日ア  
ウス御がけん山界（アマツシマツ）はれこおれ  
ともせぬ日は小野（アマツシマツ）まれはまくも  
菅原のノヘアリてとひて庵あくわ坂  
このひき緒（アマツシマツ）ぬ兵部省のゆゑ乃嘗（アマツシマツ）め  
月あくとあく丘（アマツシマツ）ちえすむりの今そ  
れ事よわうりゆゑトモリ

秋林四季物語卷中十

冬部

城北徵丈長明書

時氣終々をきうりあへもあへずふつね事  
をこのほりわづれいつまう神ひぬとども  
は泊れあ荒蕪あれとよそりへめくら  
あすれ波ねとめうとたるあ風うり神  
山すくすくを経本まうらといひ／＼あと  
や／風／＼せせらひてみ／＼／＼川すく  
波のう角むきうあうみそてい／＼／＼先  
まきとあ葉拂／＼すり下さゑにゆ／＼かね

一あるととそりなう／＼十月をし面などこ  
ぞとおり／＼波工／＼とすといはれりのと  
てま／＼すのりしるれ／＼ととをくとくと  
え／＼とくとくとくとくとくとくとくとく  
／＼あ／＼わ／＼とくとくとくとくとくとくとく  
りもああとくとくとくとくとくとくとくとく  
はりとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
波にせれ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ  
て／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ  
ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ／＼ゆ

るの四よりりつわくまれこのりらるあくぬ  
はりーと四史より時代開化のとつこ  
との御をもるきりーとニとせばほの  
津事なりや子承行とくぬとよ十月、亥  
の月ふゑとくまれ用らるゝこと承いと年  
七八月乃うとうとうあふよ、十三うみくち  
あくあさあ。とくとくいきのゆきと  
てこれとれこねりとよ、ゆうりあゆと  
てもひりかちーはくへありやくうが  
ーぬと初雪けぐんなどまと霜、ともお

りぬとく雪あ、みれこねりとよ  
て八月をとりじと十一月をとくは  
とゆあは鷹銅等あ、とくとくうりい  
らの大きと文神様の御の野のよ  
とくじぬとアヒトおのととこひの禄た  
あらぬ又この月をとせりておのととこひの禄た  
やその前とくとくとくとくとくとくとくとく  
うかさせと活部れつとよにあて拳ーゆ  
もとくかくねとくのいわを厚んとしなれとか  
れ

歌林四季物語卷之十一

冬部

和山の霜夜あつれて雪り初利  
りみ重ねのはゆみてあこうりもは敵  
あここのぬま稚れ雪ひあとれ神りしき  
わきわく花うそひすりひすりもせとろさ  
むれまればあんちもとはおひらうす  
ゑれゆりやまやまやは風うやうのとらへた  
その冬とよかとほひ小かなひぬそりすとあま  
ああへれりくらむ詠らむまめりや

見事の縁俸とぞこれ雪夜はあつる所  
のあがれをとわぬぬなりさんもの優美よ  
きあぐらこづみのとぞせりまたとぞとぞま  
つまむをゆきとせぬ公事すりじとぬれり  
角あやしのを玉縄とあくまむと  
のたれ角りのたれのはよりうりへりな  
せきのゆれとあへてひへりうをお  
うくわくひのうきまくとくのまほりぬ  
あと重くふく八神殿紙アツヌキモトモ

もやう筋れりゆて内侍の御拜が  
やわれは事より不作を陪役人長と  
まちよと様人令とあらへはる  
ぬつりあむけのねり根のて拳  
あくびたるどりのうかみに柏子やら  
きく勅宣わらばくぬりを歎早歎  
やくとくとあく取作いふ  
ひそりとくとくあくとくとく  
とあくうねとくとくとくとく  
ちは元日ととせととせととせととせと

明乃立會す。うそひをもとま日のあり  
志使わうふ。もは月の御祭礼のまつあく  
原す。わと春日ちくに御聖玉。うそひをね  
これは供よせらる。うそひをうらふ。うそひをね  
つ春日大明神、者民の御祖神とまやせ  
とも一七八人を御と紙をぬり。うそひを  
きそひをあまでかねりん。あみと原神のみ  
とちるやゆ。神代の由らうひ。あくを  
れり。はせだまひとおのれのせあをれを  
まかと一神合御。御とやまとさう。

なれ御神あくあまとあふをへくま  
せみそらゆ。角見御神なり。かくみそ  
ぬ。あそづつ。あそけは乃ゆ。とふく  
御祇宮。うそひんちくや。けく御ふとこ  
れ神も。やまとなり。ゆく。せれつ。の  
うそひ。うそひ。うそひ。うそひ。

秋林四季物語卷之十二

冬部

一之終とて、陽成院の山と見よりとすん  
こととあくまに事小ゆもとわざんつこのた  
とろりのとゆせとわきよとあうりせもか  
れ事小なへたぬお祭り也除日ゆりふいニ  
度も除日よそとて向くや。——ちゆ——  
城村のあらわにちくさめりてとお祭り翁ゑ  
まよとすりて。——はの那ハ晦日よねこある  
山車やく大と神りてつゝんせあがむ邪  
省兵庫寮六本府のたとくをひりと桃  
のうちどりて。矢城翁と翁と振子也

て緋ちふ衣衣赤と布衣とこれぞう——  
きおひくあてきありの坂とひばりあうと大  
内坂ふひあとてよゆるすとへきの松陰れ  
風の坂也ござ。——是夷の陽のとくとくと  
坂の陰坂屋うりんとのとくとく。——陰陽寮  
祭文とよみ神つとひト部れ月とたとと  
ちかくして座ぬよとせなやうふねとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
松竹よあらきぬのねとどうとくとくとく  
あとすと家とあれけり御門公卿凡家は

ゆくやうりひへ／＼の民のまみりひ  
育てぬせ風／＼とまなふをもとあゆめ筋は  
きりそりそりおとてた／＼おもあ大内はされ  
死すと身のねゑめれり／＼おいよもひをあ  
くふとせがと風／＼と竹の篇文紙壁にて  
春すのみぢやありゆつりとあじとくらまよ  
わりとせの雪霜にとづまくあうとまもあ  
もとづりのふくまの冬風がまくとまもと  
ら／＼とまく、お城のとじゆくとまくと  
一筋とまくをつりなとやとまくとまく

ゆくひゆう／＼あくとまきはあをね武部と  
うゑとゆうなりおほくらつとねいゆみ  
察とりをとよつるとまうりよれとあ／＼  
と公の西ととひとととととととととと  
てあ／＼とととととととととととととと  
とと／＼よほとととととととととととと  
ゆうりのな／＼一かねくとまき／＼  
草とやく／＼おとよりらあみあ延喜の御  
西宮のゆゑと見え／＼ととがんと  
ゆ

此物のうは去佐守貫之乃枕前也おもひ  
とひうけりゆく枕前とあひめぬと  
義初の耳り無一ゆくとくわく  
くわくをあゆく入まつてあくち

ゆきり

三月下院

桑門蓮胤

縣主旌旗宣示文書

鴨御祖社系圖

鴨

齋

主

同

真

繼

同

吉

繼

門

中

綱

直

綱

良

同

氏

主

弘

永

主

時

主

千

繼

同

真

吉

同

惟

秀

同

正

秀

同

維

方

同

真

助

同

弘

雄

同

永

主

時

主

千

繼

同

負

繼

同

稻

繼

同

吉

繼

同

氏

繼

同

貞

繼

同

津

倉

九

同

祝

齋

同

弘

永

主

時

主

千

繼

同

真

吉

同

惟

秀

同

正

秀

同

維

方

同

惟

清

同

後

集

舊

院

同

惟

清

同

惟

任

同

經

貞

同

惟

貞

同

貞

長

同

清

長

同

清

光

同

清

繼

同

貞

重

同

貞

真

惟時

辰

貞重

惟道

惟季

季長

季繼

有季

季平

保季

稱宜

同正西位上

同正西位下

無釐惟長女

惟一

同正五位下

有繼

長守

道平

稱宜

五位

同正五位上

長明

號菊太夫

稱宜

同

鳥羽院

崇祚院

無釐惟長女

惟一

同正五位下

